

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	時文摘話（第四）：雑録
Author(s)	黒本，植
Citation	龍南會雑誌， 3 1： 3 1 - 3 5
Issue date	1894-11-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4468
Right	

する *Camptodes* を得たものは實に愉快ありき。該種は余未だ熊本に於て一個も採集すること能はざりしかば、這回の採集こそ兩者の關係を檢索するの端緒を得たるものにして、最も貴重なる材料ありとす。余が採集せたる多足類を擧ぐれば大略左の如し。

蜈蚣類	<i>Scelopendridae</i>	一種	馬陸類	<i>polydesmidae</i>	數種
	<i>Lithobiidae</i>	數種		<i>Jnidae</i>	數種
	<i>Geophyridae</i>	數種			

詩文摘話 (第四)

助教授 黒 本 植

○タメの詞を用ひ誤れる事

「タメ」といふ詞は、もと助くる心の詞にて、詩などに用ふる與の字を「タメ」と訓めるは、誠によく考へたる者あり、又漢字の爲の字を「所以也」とも注するより、眞名伊勢物語にて「君ガタメニ」といふ所に、君之故を填てたれども、「タメ」といふ詞は、右にいへることく、助くる心の詞をば、「ユエ」といふへき所に「タメ」といひし所は、一所もあし、又佛足跡の歌にも、知々波々賀多米、毛口比止乃多米爾、また、乃知乃與乃多米、麻多乃與乃多米、また佐麻佐牟我多米爾などありて、皆助くる方にいへり故に、今この例を設けて、いはん。

君ガタメニ云云

國ノタメニ云云

人事ヲ行ハズガタメニ云云

ソノ目的ヲ達センガタメニ云云

などの外、決して他に用ふる詞にあらず、然るに、今日の文をみるに、或は無用の所に用ひ、或は「ヨリテ」といふ所に用ひ、或は漢文直譯のまゝにも用ひて、「タメ」の詞の濫用、極れり、その二三をあげて、いは、

某ハ天皇陛下ニ召サレタタメニソノ名ヲ擧ケタリ

某ハ重禁錮何ケ月ニ處セラレタタメニ其ノ名ヲ墜シタリ

賃銀ヲ安クシタルガタメニ製品ヲ惡シクセリ

火事ニ逢ヒタルガタメニ家産ヲナクシタリ

風タメニ起ル 波タメニ生ス

鬼タメニ泣ク 人タメニ感ス

右の類、枚擧に遑あらず、夫れかゝるわろらぬ處に「タメ」の詞を用ふる故に、言語にもうつりて、どかく無用の處に、おれを使ふこととはなりぬ、今右の詞をも改むれば、第一の「タメ」の詞は、上に「召サレ」「處セラレ」の受動詞あれば、皆無用あり、第二の「タメ」の詞は、皆「何々ニヨリテ」とかくへきあり、第三の「タメ」の詞は、第三と同しく、「ヨリテ」の義なきをも、これは、もと、漢文の極めて簡にかきたるを譯したるあれば、上文よりかき改むれば、この詞は、用なきなり、抑、これは、只今日の人を咎むべきにもあらず、三四百年來の誤にて、道春熙の四書などにも、あゝる點をつけたり、これよ就きては、漢字の本義を一わたりいはんに、この爲の字は、二義あり、一は、受動詞に用ひ、一は、以、由などの

字ど、もと普通にて、通用せる、是あり、受動詞に用ふるは、爲所の二字を句の上下に挿むと、常あり、たとへば

爲人所殺 爲人所助

あとの類あり、これを我が邦の詞に譯せば、人ニ殺サル、人ニ助ケラルといふ、即爲所の二字は、邦語の「サル」「ラル」あどにあたる、是にて足ることあり、然るを、古より

爲人^{タメニ}所^{ナル}殺

と點をつけたる故、書下しにまては「タメ」の詞、何の用をもなさず、あまつさへ、意義に大なる間違を生ずるあり、この甚しきに至りては、

某^{ナル}爲^{ナル}人^{ナル}所^{トス}殺

とやうに、點をつけて、漢文をよめる者、往々あり、これによりて、文中に「何々スル所トナル」といふ文句、極めて多くなりぬ、かくては、「人ニ殺サル」といふ意味にはならぬあり、又漢文にては、右の爲所の所の字を省きて、只爲の字のみを用ひて、受動詞とすることあり、即「風爲起」「波爲生」あどの例にて、これは、風、波の他の物に起さるゝ意あり、しかるを、爲の字を「タメ」と訓む故に、風、波の故さらに、他の物の爲めに起りもし、生じもすることありて、自動、受動の大なる違を生ずるあり、猶とに比較えて掲げば、

君ノタメニ殺ス

人ノタメニ殺サル

自ラ目的チ達センカタメニ働ク

空^ニ病^ニ生^ス

この表にのきて、よく考ふれば、思半にすぎあむ、うの文同しくして、うの意異なることは、あるまじきことなり、あはれ、我が邦には、うれ／＼の詞のありながら、訓點の誤謬に滅却せらるゝとは、豈口をしきことあらすや、

はてその以由の字と通用せるは、孟子に、

飲食之人則賤之、爲其養小以失大也

この爲の字は、即以由と通用せるものなり、この用法は、極めて多かり、故にこれを譯す時は、

以由小ヲ養ヒテ大ヲ失フヲ以テナリ

以由小ヲ養ヒテ太キ失スルニヨル

あぞいへは、意味よく透るべし、猶この方の語氣に近づけて、いはゞ「失へハナリ」「失フ故ナリ」あといふへきにや、この類、あくるにたへす、故に讀む者は、その所に從ひて、かゝる所の爲の字は、皆以由あぞの字よかへて、よこもし、かきもすべきを「タメ」の一訓もて、何れをもよみける故、かゝる誤は生じぬるるかし、

因に云余東京にありし時、川田登江翁の演説に、今下俣の話をきゝても「夕、鄰ノ主人ガ強盜ニ殺サレマシタソウダ」といへど、「人ノタメニ殺サレマシタ」とはいはぬ、これが正しき詞あるを、學問ある人は、却の誤りたる口上を使ひて、詞の正しき方を滅せるは、いひかひあることなり、と申されしは、洵にさることにて、今學問あき者の口上をきくに「タメ」といふも、「エエ」といふも、「ヨリテ」といふも、皆れのく／＼の用ふべき所に用ひて、少しも違へることなし、是非とも、詞の正しきは取り、あしき方は、文章語の正しき方をもて、改めなきものにこそ、次手にいひなく、東京の詞に、

右の受動詞の「セラレタリ」などを「サレタリ」といふは、他の「ツカハサレタリ」などの佐行の働と、大に紛はしきのみならず、邦語にあつることあれば、用ひぬ方、宜しうらん、「セラ」のかへし「サ」あれば、あしからじといふものもあれど、詞の延約は、いつこへも用ふべきものは。

ツェルギー

溫知學人草稿

二十七刀學人圈點並批評

史に曰く「ルイ十六世の時負債益々重大にあり、歳入愈々欠乏す、是に於てかツェルギーを採用て海軍太藏の大臣に任せり。ツェルギーは非常に正大なる政治家にして、而も卓見ある經濟家ありき。彼は奮て難局に處し、經費節減を斷行し、歳入増額に必要な改革に着手し、或は商業の振起を謀り、或は會社を解散し、或は農民に不利ある勞働規定を廢し、或は地方自治權を増進する等、見るべき事業少もとせず。然れども此等の事業及び其他の行政軍事に關する改革は、痛く貴族僧侶並に私利を擅にせる朝臣の反對を喚起し來り、

評に曰く、自家の所信に熱中する甚しき、此輩群小の反對力の按外強大なるを洞察するに至らざりしこの説あり、或は知らん

王も爲めに英斷を以てツェルギーを用ゆる能はず、止むなく彼をして職を退かしむ。是に於てか佛國革新の好機會終に去りぬ」と。此の如くして佛國革命は起り來れり、嗚呼實に時ある哉。ツェルギー十分に敏腕を振ひて、改革の事業を完全する能はざりしと雖も、彼をして其經綸を十分實行するを得せしめば、果して如何ありしあらんか。或は無道の革命も、恐怖の治世も來ることなくして、第十九世紀の文明を迎ゆるを得ざるも知る可らず。思ふよツェルギーも亦時勢を洞察して驟起せる大人たらざ